

風 韻

三十周年記念号

第 3 号

(1963年度)

神戸大学風韻会



宇治師範を囲んで……

昭和37年11月11日（日）三十周年記念議会 於六甲台講堂

三十周年記念号発行に際して

前田 紀 一 郎

一昨年(昭和三十一年)の三月「風韻」創刊号が出されて今年(昭和三十三年)三月号を送ることになりました。昭和三十七年は神戸大学風韻会創立三十周年の年でした。創刊号が計画された時からこの三十周年という記念すべき年がその編集に当られた先輩たちの念頭におかれていたわけであり、すなわち創刊号は、第三号のための準備という意味で我々に礎となつていたので考えます。「第三号は三十周年記念号にするんだぞ」創刊号、第二号は私の耳元でささやき続けてきました。このような背景をもつて第三号を編集しようと考えました。そしてここに先輩諸兄の絶大なる援助と現役諸君の辛勞を惜しまぬ協力の結果第三号記念号を発刊したく思います。OB諸兄の叱咤と我々の意気込みにもかかわらず、出来上つたものは如何なものでしょうか。

そもそも「風韻」創刊の意図及び第二号へと引き継がれた思想は、先輩及び現役会員相互間の連絡の緊密化であります。年刊誌を通して現役は昨年の活動状況を反省し、又は能謡曲に関する研究発表をし先輩は現役時代を回顧し又は現役の進む方向をみつめて批判と教訓を与えて下さる、そういったものが「風韻」の有つべき使命というべきでしょう。にもかかわらず現状は、現役の機関誌に対する認識は極めて低く積極的に投稿する者少なく、先輩の原稿もいわば他人行儀の如く現役に対する厳しい鞭撻が若干不足しているように思われるのです。現役としましては、先輩として厳しい働きかけを期待しているのです。生意気なことを申しましたが、今後「風韻」がこのような方向に進んでいって欲しいと願っているのです。そうすれば三十才の壮年期にある神戸大学風韻会はますます隆盛発展すること必定でありましょう。

(十一回生幹事)

神戸大学風韻会三十周年記念

御礼の挨拶

会長 藤井 茂

学生幹事 前田紀一郎

神戸大学風韻会三十周年記念事業につきまして卒業生各位、顧問の諸先生に御支援をお願いしましたところ、快く御承引下され、多額の御醸金を忝うし、誠にありがたく、厚く御礼申し上げます。

お蔭をもちまして、記念事業も滞りなく、有意義に終ることができました。記念謡会は各方面の賛助出演もあって盛会でしたし、当日、宇治師範に感謝状と記念品をお贈りすることもできました。多年御薫陶に当られた宇治先生に感謝の微意を表することができたことはこの上ない幸でございました。

記念謡会終了と同時に御礼の挨拶状を差出し、事業の報告をすべき筈でしたが、記念事業の一つとしての会誌、記念号の刊行が残っていましたので今日まで遷延いたしました。記念号の会誌に謡会の様子や会計報告などを掲げまして、事業報告に代えさせて頂くことを御了承下さい。

記念謡会、宇治師範への記念品贈呈、記念会誌の刊行の三つの事業を完了して、各位の御支援と御協力に感謝の念を新たにしております。重ねて厚く御礼申し上げます。

I 運営に当って

昭和七年四月に、観世流謡曲部に宇治師範をお迎えして以来、昭和三十七年度は三十周年に当ります。

宇治師範を迎えてからそれまでの会名鞍馬会を風韻会と改めて新出発をしましたが、年とともに隆盛を加えました。戦争も段々と激しくなり、いよいよこれまでというぎりぎりの時まで学生の謡は続けられ、戦後はサークルの中で最も早く復活し、新制神戸大学となっても滞ることなく、神戸大学風韻会は発展し続け、今日の隆盛をみることもできました。これ偏に宇治師範の永年に亘る御熱意の賜という外ありません。神戸大学風韻会は発足以来脈々三十年を数え、ますます隆盛の一途を辿っております。他の大学サークルで、一人の師が続けて三十年間も指導に当られた例はほとんどありません。この間、宇治先生は、数多くの優秀なOBを世に送り出され、今日なおかくしゃくとして現役学生の指導に当って下さっています。この永い伝統を回顧し、師恩を謝し、将来の発展を期す意味で、三十周年は記念することは極めて意義深いことであると思えます。

この三十年という永い期間に亘り宇治師範は終始変ることなく、その卓越した人格と至高の芸術的境地をもって学生の指導に当って下さいました。私共が心から感謝致しておりますことは、先生の指導が謡い方の指導にとどまることなく、常に心の指導を心掛けて下さっていることでもあります。

——物事には何にでも心髄がある。能謡を正しくつきつめて行くと必ず深い境地に到達することができる。これこそ能謡の奥義をつかんだものであり心髄を体得したものである。ところで心髄というものは何事を行うにしても唯一であり、能謡の心髄を得たことは人生百般においても心髄を得たこととなる——

先生は心髄を得た心の状態を「風韻」と表現しておられるように思います。人生における心の持ち方・心のあり方こそ本質的に大切なものであり、精神の浄化高揚にこそ人は努力すべきであるとお考えのように思います。先生は学生の稽古に当られる時に屢々「すこしぐらい節を間違ってもよいから腹の底からできるだけ大きな声を出さない」と云われま

節にこだわらずにその曲の人物になりきって謡いなさい」とも云われます。節のことはかりを考えていると節の上げ下げがこなせればそれで終ってしまった、もっと趣の深いところまで進むことができないということでしょう。謡に接して二、三年の内は専ら節その他の技術的鍛練に余念がありませんが、卒業するところからそれを認識しはじめると見えて、当誌に寄せられたOBの言葉の中には、宇治師範に精神的指導を受け多くの教訓を得た由がうかがえるのであります。

このように先生は熱意と慈愛の溢れる御指導態度でもって三十年間学生に接して来られました。今後末永く指導を続けて頂けるよう念じておりますが、三十年の歴史を記念して先生の御恩顧に対して謝恩の微意をあらわしたいと思つた次第であります。

A 記念事業募金について

記念事業としましては、記念謡会を行うこと、「風韻」三号を記念号とし特別編集すること、宇治先生に感謝状と記念品を贈呈することを計画しました。それぞれ費用がかさむことが予想されたので、OB会員には、今回特別に「神戸大学風韻会三十周年記念事業募金について」一口壹千円の募金をお願いし、現役会員も雑費用を補填する意で一人平均四百円の募金を求めることにしました。謡会につきましては、質素なものでよいから実のあるものという考えから、醸出された基金は記念号を少しでも立派なものにすること、少しでも宇治先生の喜ばれる記念品を贈ることと主眼をおきました。

募金方法は、京阪神の方は学生が頂きに上り、遠方の方は振替貯金口座をもうけて利用していただくことにし、試験の明けた九月末から着手しました。私共の無理なお願ひにもかかわらず、皆様の熱烈な御協力を得ることができました。予想を上回る好成果を収めることができました。このような皆様の熱意ある御支援を受けましたことは私共事業を担当した者にとりまして感謝に堪えないところであります。一々挨拶状を差出すべき筈でしたが、ここに紙面を借りまして心から厚く御礼申し上げる次第であります。なお、募金状況ならびに会計報告は別表別項の通りでございます。これまで誌上をかりまして報告させて頂きますことを御諒願いたします。

B 記念謡会について

謡会の時期を決めるのに次の点を考慮しました。(一)気候の良い頃 (二)現役とくに四年生に比較的余裕のある頃 (三)準備期間・稽古期間を充分にとれる頃。五月は一ツ橋大学・大阪市立大学・神戸大学三大学第六回交歓会の主催校に当つており、六月は上旬に関西学生能楽連盟春季大会、後半になれば四年生は就職に奔走するであろうし、九月は定期試験、十月は学期の移り目(とくに本学は二年生が後期から専門課程に移行する)でなんとなく落ち着かず、結局十一月が最適ということになり、宇治師範に十一日(日)と決めて頂きました。会場については、候補として、本学六甲台講堂、湊川能舞台、須磨栗岡幽仙閣等考えられましたが、OBの方には久し振りに母校に来て頂いて昔を偲んで頂くのも良いと思ひ、学外の方々には本学を見たらう機会でもあるし、又以前にも講堂で謡の会を催したこともあり、会場費節約ということなども考え併せまして、本学講堂を謡会々場と決定しました。謡会の日時と場所を決めましたのが四月に入つてすぐのことでありました。

当番校としての三大学交歓会(五月五・六日)を無事終えましてから、大阪市立大学から能楽研究会創立四十五周年記念会を催す旨通知を受けました。四年生有志は賛助出演のついでに準備計画のことや運営の様子などを聞かしてもらい、計画は周到に、準備期間はゆつたりと、という注意を頂きました。

記念会にはできるだけ多くの方に参会願わねばならず、そのためには情宜を充分にやることです。近藤康夫氏(三十五年卒)から「葉書で波状攻撃を加えろ」と命令を受け、七月以後二度ほど暑中見舞なども兼ねて案内状をさしあげ、九月末には謡会に出席願える方を確認、それをもとにして、宇治先生に番組を組んで頂きました。又学外からは、関西学生能楽連盟の連吟、大阪市立大学能楽研究会、奈良女子大学観世会の各々仕舞数番、学内から神戸大学宝生会の連吟と、現役が日頃お世話になつている学生グループの賛助出演を願えましたのは誠にうれしく思いました。それと並んで宇治風韻社中の方々にも素謡と仕舞を添えて頂きまして、華かなものが得られました。多数の顧問の教授各位の御出演を得たことも感激の至りであります。狭い紙面を借りまして皆様に厚く御礼申し上げ、今後共御厚情御指導の程お願い申し上げます。

現役の素謡仕舞連吟を加えた番組(別添)が出来上りましたが十月下旬で、急いで皆様に送付し、謡会当日が迫るのを待つことになりました。

(前田紀一郎)

輩の賛辞を呈されたこと、一方ならず我々にも多大の刺戟として受取られ、引いては両校の長期に涉つての、友情をこの三十年を機縁としてより一層深める意義を持ったことと思われる。奈良女子大学の遠路の御来校は、近年の本学、風韻会の活躍の規模と多面性を、現役各位が、先輩に顕示し得たという点に於いて、最大の効果を我々に及ぼしていたこと、又、言うまでもない。

終日の、楽しい会を最後に飾るものとして、柚木教授のシテによる「安宅」のあと、師範の「祝言の仕舞」を以て千秋楽となった時、既に六甲台は秋暮の色を濃くしていた。同級生の奥様御同伴を見せつけられて、「これではならず」と発憤された御方。更には奥様初めての御妊娠と伺い「立派なものだ」と改めて敬意(?)を表した。現役悪童諸兄、更には「来年よりは東京勤務の為、しばらく顔をみせることも難しい。」と六甲台にお見えになった方々。

感謝状

師範 宇治 正夫 殿

あなたは昭和七年に神戸大学風韻会が発足してから三十年の永きにわたって至高の芸術と人格をもって指導に当られました。ここに三十年記念語会を催すに当り永年の御功績に対し謹んで深い感謝の意を表します。

昭和三十七年十一月十一日

神戸大学風韻会

会長 藤 井 茂

ようやく、社員生活にもなれ、いよいよ発展を示されんとする卒業後、一、二年の先輩の久方ぶりの交歓。様々の人生の様相を集めて当日の会は終つた。

好天の秋日和にめぐまれて何とも言えない良い一日であつたけれども、入少々もの足りないこともないではなかつた。

大先輩及び学校を近年に卒業なさつた諸先輩には、多数の御出席を戴いたけれども、壮年期の中堅をなす諸先輩の御出席の少いのは、せつかくの当会の盛況を、やさみしくさせた。現実、日々の激務に謡曲どころではないのかとお察しするが、たま



素謡「千手」 シテ 国重猛 ワキ 西尾雄一
ツレ 米花 稔



宇治風韻会社中による仕舞「小袖曾我」

には、六甲台にお上りになつて、学生気分をとり戻し、久方ぶりの剛吟に我をお忘れになると、又明日への仕事のファイトも一層高まるかと思われます。この点は、単に今回のみならず、常時風韻会の度に、私の痛感するところなので、敢えて一言付け加える次第。

夜の記念会、又恒例の如く、恒例の各自得意の出し物が出て、楽しい一夜を六甲台の平和楼で過した。本番より、こちらで熱演を示した豪傑もいた様に覚えてゐる。中には、学生時代御愛唱の歌曲を、現役に無理矢理に歌わされて、御自分の昨今とやや勝手が違つて苦笑された方もおられた様だ。

三十周年の記念目録贈呈の御礼として、宇治先生のおっしゃつた御言葉の中に、「ただ、夢中に謡を通じて諸君と一緒にやつてきたことが、今三十年になつたかと、改めて驚いている。」とあつたが、光陰矢の如く、又すぐに五十周年がめぐると思われる。

甲台にその記念日を迎え得ることを切望して、三十周年当日の素描を終わりたいと思ふ。
(形部靖)

Ⅲ 寄附金集めに歩くの記

此度は風韻会三十周年記念行事並びに雑誌「風韻」第三号発行にあたり、先輩各位に絶大なる御支援を賜わり、まことに有難う御座居ました。お蔭を持ちまして昨年十一月十一日に記念語会をところりなく納めることが出来ました。ここに厚く御礼申し上げます。

扱て昨年の寄附金集めは三十周年行事費と雑誌代を兼ねたものでしたが、雑誌の方は今後とも連絡・通信の場としていつまでも発行し続けたい思い、その為には毎年現役が寄附金を集めに回らねばなりません。そこで此度の資金集めに際しての現役の働きぶりを知って戴き、今後の資金援助に尚一層の御理解を戴ければと思います、ここにペンをとることにしました。

× × × × × × × ×

昨年の夏、吉野山竹林院で開催された合宿の場で、丁度その時参加されていた原・永田両先輩を混えて、現役が来るべき三十周年行事に備えてのあらましのプランを立てました。先ず現役の役員を、誦会当日関係・雑誌関係・資金集め関係に三分割し、その責任者に夫々、形部・久下・井上が当り、前田が総括することになりました。勿論、実際に仕事に当るには全員の協力的な活躍が必要であり、事実、寄附金集めには日頃あまり練習に來ない者まで動員しました。

さて、資金はいくら程集めねばならないか。従来は雑誌代に四万円程で良かったのです。しかし日頃タダ同然でお世話になり、それも三十年間も続けて下さっている宇治師範に対して、教えを受けた者一同が形の上でお礼の気持を表すのはこの時以外になく、何か記念となるものを贈呈しようというのは、かねて顧問の藤井先生を始め諸先輩の意見の一致するところでした。そこで入用資金の見積りを立てると、右の記念品代が十万円、雑誌代が四万円、記念大会当日費用・通信費・交通費・雑費に夫々一万円、合計十八万円ということになりました。しかし見積りの上ではこうなっても、果して実際にこんな大金が集まるのだろうかということが心配でした。なにせ資金が集まらないことには計画倒れになってしまうからです。

次に九月上旬に四年生ばかりが宝塚の中山寺で来るべきコンクールに備えて合宿をし、その帰りに前田・久下・井上の三人が藤井先生のお宅を訪ね、相談致しました。先生は右の案を諒承され、具体的にどうするかについて指示を受けました。そこで決ったことは、①藤井先生が総責任者の任にあたる、②寄附金額は従来の五百円では目標に達しないからこれ

を千円とする、③従来の様に、地理的に比較的行き易い先輩だけを頼らず、全員に願ひする、④卒業して年が経つ先輩ほど多額を願ひしたいが、逆にそれだけ謡曲から遠ざかっておられることにもなる。従って先輩各自の「気持」に頼らざる外はない、等々でした。

そこで秋の試験が終わったある日、大阪の地図を作って在先輩のビルを書き込み、これを回る現役を五つの班に分けました。神戸・姫路・京都へも足をのぼし、場合によっては東京へ行くことも考えました。ところで大阪に住む現役はたった二名なので（二年生に資金集め以外の面で働いてもらいました）、神戸・加古川からも動員し、その結果大阪へ七度も往復した者も居ります。現役が実際に先輩に接するのはこの頃からで、日頃のサボリが朝の九時から地図と領収書を持って歩き回るので、十月いっぱいには資金集めに奔走しました。この他にも顧問の先生方からも戴き、郵送による分も増えて、現役も出資し、日々の獲得高に一喜一憂しながら八万円ぐらいになった処で十一月十一日を迎えました。そこで今後の予想を立ててみるに、どうも宇治先生への謝礼は十万円は無理だということになり、八万円に落着きました。（尚、宇治先生への記念品は御希望により鏡一面を贈呈しました。これは他日、先生が稽古場を作られるときに使用されるためということになっております。）尚、雑誌等の費用はその後に集まる資金に頼ろうということになりました。

× × × × × × × ×

以上が昨年の行事に際しての資金面での現役のとった行動です。やはりまだ怠慢であった為、いろんな点で不備が生じたことにお詫び致します。此度の寄附金集めについて先輩各位、顧問の諸先生から与えられた心からなる御支援に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともよろしく願ひする次第であります。

（井上文男）

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

会計報告

I 三十周年大会関係

教官先輩の寄附	134,000	宇治先生への記念品	80,000
現 役 醸 金	1,455	寄 附 金 徴 収 費	
		交 通 費	5,975
		電 話 代	1,760
		通 信 費	4,920
		番 組 印 刷 費	3,000
		感 謝 状 用 額 緑	555
		振 替 金 払 出 料 金	500
		雑 誌 (風 韻) 代	38,745
合 計	135,455	合 計	135,455

II 三十周年記念謡会当日関係

役 料	10,700	昼 食	9,050
特 別 寄 附	1,400	文 房 具 (巻 紙 ・ 他)	350
現 役 醸 金	2,995	茶 菓	1,195
		写 真 代	4,500
合 計	15,095	合 計	15,095

(醸金者名簿は別紙に記します)

(井上文男)

千 差 有 路

学十二回 伊藤欣二

大道無門 千差有路 透得此関 独歩乾坤 また学生の頃失意の
或る時期に小さい書店の老主人から此の句で励まされたことがあつ
た。この句を忘れることが出来ない。

宇治先生の門をたたいたのは昭和十七年十月である。他の人は如
何か前から何となく惹かれて習い初めた謡曲であったが、応召、転
勤などで中断、また怠り勝ちの稽古であったために四、五年前に漸
く重習につかして戴いた。処が実力未だ不伴ということか、一番二
番のあと之は大変なことであると漸くにして悟らされた。単に趣味
を仕事に生かす底のものではない。まことに「此道に至らんと思は
ん者は、非道を行ふべからず」(風姿花伝) 達人たらん者は一生一
道に専心すべきで他の道に心を移すべきではないのである。しかも
毎日あくせくと営利を追う我身分である。離れるわけには行かな
い。営利業務といつても単に手段的に終るものではなく、深い心構
えによつては之をも一種の行道と観することが出来るであろう。と
すれば二道に迷うことになるのである。二三年前に抱いた悩みであ
る。大げさに考えすぎるのかもしれない。併し私にとっては一時期
であった。

大学では佐野一彦先生の最初のゼミナールに懇願して入れて戴い
た。学生は二人丈けであった。今更不肖の弟子たることをさらけ出

すことになるのであるが、当時先生の類型学的考え方からの美術
史、国学、独逸思想史の御講義や実地の御指導に接して、私にとつ
て新しい世界、新しい次元に立たされたという思いを一再ならず経
験した。この様なことは大なり小なり誰方にもあることなのであ
う。業務面でも十年も経てば何らかの感慨無きを得ない。併し卒業
の後、人生観或は世界観的に似たような経験をしたのは今度が初め
である。窮地に陥って混迷するとき、私は冒頭の句を思い出して
やけくそに似た度胸を据えることが時々ある。二道の悩みも私は之
により一応観念的に解決しようとなつていく。近代の人にとつ
て、若し趣味の道をも真剣に追求しようとするなら、大方の人は
同じ悩みを持たねばならぬだろう。何れの一道をも離れることが出
来なければ、二道とその儘弁証法的(と言えるか何うか)に一道と
観するまでである。職業と謡曲とは互に役に立つという功利性を超
えて、互にまた一途に道を深めるものとなるべきではあるまいか。
現成出来ることか何うかは分らぬ。抑々こんな考え方はおかし
いであらうか。

もう幾年前になるか、同じ体験の方もおられると思うけど、ウイ
ーンフィルハーモニーが来日、「これが本当の音楽だ」と心の底に
痛感した喜を忘れない。併し謡曲は自らの生身で深い芸術を表現出
来るのである。之れ以上の悦はあるまい。悩みと苦勞が大きければ
悦も亦深く大きいであらう。「まことにまことに、能を知らんと思
はば、連続に習ひ極めて、功を積む所にて、おのづから心に浮かぶ
時、是を知るべし」(花鏡)

私をこの世界に

ひきつけているもの——

経済学部 二回生 諏訪秀行

阪急六甲駅より、アメリカ兵の色とりどりのハウスを右手に、正面の緑なす六甲山を眺めながら約十五分、アメリカンスクールをすぎ、やっと六甲学舎の正門に近づく。その正面の少し手前の学生寮より毎日のように聞えてくる若さに満ちた謡曲の声。謡曲とは、能楽とは……その歴史的背景も、内容も、現代における意義も、芸術的価値も……とにかく、こういった事について何の感心も知識も、又知ろうとする意欲も持っていなかった一人の学生が、この学生寮から聞えて来る若さに満ちた力あふれる謡の声にひきつけられ、何も考えずにその中に飛び込んで行った。時は今から約十年前の昭和二十七年の秋であった。

私は、謡曲や能楽に関する歴史なり意義なり、内容分析なりについてのみつかしい論説、論評は、諸専門家や諸先輩に譲りたく思う。そういった事よりも、十年後の今日もなお強く強く私と謡曲とを結びつけ、身体の中をあつくぐるめぐりまわっているのは、とりもなおさず、前述の学生時代に受けたあの得体の知れぬ感銘と魅力——現在もなお不変で新鮮な——以外の何ものでもないからである。

こう言うてはみたものの、実を言えば、学生時代の私は、クラブ

信じ感謝している。

そして、今日なお十年前に私を理くつなしに遮二無二引きずり込んだあの魅力が強く新鮮な力で私の心をとらえているのである。

勿論、この魅力は最初に私を外界よりこの世界にひきつけた力であり、その後十年間、まがりなりにもこの世界に入っていると、この魅力とは別に、新しい別の魅力も湧き出て来るのである。それは、何も謡や能楽を色々の角度から深く研究し、その歴史的背景や、内容等を深く知った上での魅力では決してないのである。

これがよい事であるかどうかの批判はさておき、「与えられた謡なり、仕舞なりに、何はさておき飛び込んで、全生命を打ち込み、とに角その境地の中に全く没我的に浸り込める時の充実した幸福感」……これがこの十年間この世界の中より得られた最大の喜びであり魅力なのである。

私の日常生活において、何もかも忘れ、全く無慾で真剣に打ちこむ事の出来るチャンスは、この謡や仕舞に打ちこんでいる時を除いてはあり得ない事であり、この時こそ、とりもなおさず、純粋な意味での最高の喜びと、幸福にひたっている時なのである。

× × × × ×

× × × × ×

メンバーの中では一番不熱心なメンバーであった。同期のメンバーの中には、熱心で卓越した方々が多く、その中でも、特に大角君、毛受君、五十嵐君等は忘れられない友である。

五十嵐君は、遠く山形県の産で、その筋のよい謡い振り、声量の点では抜群であり、卒業後も共にこの道を歩まんと期待していたが、卒業後、故郷へ帰ってしまった。その後、何の連絡もしていないが、山形市で元気に活動している事だろうと思う。将来、是非一緒に謡ってみたいものである。

毛受君は、わざわざ私の家までやって来てくれて何の曲か忘れたと一緒に謡い教えて呉れた親切な友である。又、彼については、神戸大学創立五十周年祭の帰り、確か大阪の南であったと記憶しているが、一緒に飲み、心地よきそうに、知っている多くの曲を無本で謡いまくってくれた時の姿が忘れられない。

最も不熱心であった私と全く反対に、最も熱心でリーダー格であった大角君。結局の処同期のメンバーの中で、宇治師範の暖かい御指導を卒業後八年間受け得られた者はこの両極端の二人だけである。そして彼こそ常に、私の前を歩き、私を導き今日まで引張ってくれた最良の友である。その彼も、この秋に四国へ栄転され、今や同期のメンバーで現在なお宇治師範に直接御指導を願え得ているのは、皮肉にも、十年前最も不熱心だった私一人だけとなったのである。

かくて、宇治師範の全く不変の暖かい良き御指導を受け、又、諸先輩や同好の諸兄の御鞭撻により、今日まで謡曲の世界において、その魅力の中にひたり得ている私に、真にラッキーな男であると確

一葉の写真

昨年十二月二十七日付毎日新聞を御覧になった方はお気付のことでしょう。

読者写真コンクール、一席入賞の組写真の一枚に關西学生連盟秋季大会での井上文男君の勇壮な(?)舞姿がありました。

井上君、喜ぶこと、喜ぶこと、しばらくはその話でもちまきり。コンクールは未席ながら妙なところで、一席になったものと同苦笑い。「寒翁が馬」の現代版ともいべきか。

話は発展して後期試験たけなわなりし頃、兵庫のさる養老院より手紙が舞い込み、いわく「新聞紙上で学生の皆様の生気溢るる姿を拝見し、大いに感動しました。ついては一度、若々しいお姿を拝見したい」とのこと。

一同大いに張切り、三月二日に赴かんと予定したところ、先方の都合により六月に延期された。これを聞いて、残念至極と卒業生の口惜しがること限りなし。それはともかく、我々の拙い謡を学内のみに止らず、広く一般に聞いていただく機会を持ち得んとしたことは、意義深いものがあろう。

(K)

宇治先生を囲んで

座談会

本年度は風韻会三十周年の記念すべき年でしたが、宇治先生にとっても、四十五周年という輝かしい記念の年でした。

この四十五年間の長きにわたって、能楽一条に歩んで来られた道を、振り返っていたきながら、当時の思い出をお伺いしよう、年の瀬も押し寄せました十二月二十七日、藤井先生にも御足労いただき、宇治先生を宝塚にお訪ねしました。

出席者

師範	宇治 正夫
会長	藤井 茂
学生	前田 紀一郎
	久下 昌男
	井上 文男
	浜本 竜彦
	大良 晃彦

たそこに来合わせた人が私にも教えてくれというようなことになって、遂に私も何時の間にか先生になってしまいました。(笑) そんな訳で、実際に話を教え始めたのは四十五年より大分前からです。

藤井 最初にお付きになったのは手塚享太郎先生ですね。

宇治 そうそう。あの時代の一番代表的な人で、非常に魅力がありました。

藤井 張りのあるお声でしたね。

宇治 やり手で、頭の良い人でした。

藤井 当時は豪快な謡が多かったですね。

宇治 型にはまらぬ豪快な謡が沢山ありました。或る人のことですが、能を演ずる謡としては頂きかねますが、特に「鶺鴒」が得意で、その人の「鶺鴒」を聞いていると本当に引入れられる様に面白かったものです。その頃は費用や人の関係で演能が少なかったため、模範にする様な謡を聞くことも稀で、自然自分の頭の中でどんなものでも作り上げて勇敢にやったもので、突飛な謡も沢山ありました。

井上 何々先生独特の得意芸があったのでしょうか。

宇治 一流の先生になると流石にそれ程奇抜なことにはなかったですが、例えば今の人は節の上でや拍子することに就てもある程度知っている人が多いですが、昔は舞台へ出ておいても、打切一つ知らぬ人が多かった位ですから、気が向くままに自由にやる様なことが多かったものです。ある時、さる有名な先生が「融」の中で、強吟のところを全部弱吟で謡われたので、あとでそっとお尋ねし

藤井 今年には宇治風韻会四十五周年という記念の年をお迎えになり、四十五年間芸道一筋にお進みになり、芸道を通じて社会の情操を高め浄化にお努め下さった意義の深い年だと思います。今後ますます御発展されることを祈念しております。今日は四十五年を回顧していただきながらお話しして頂くことにしましょう。先ず謡を志された動機からお伺いしたいと思います。

宇治 私が謡を始めたのは幼時で、祖父に教わった訳ですが、余り記憶がありません。本格的に始めたのは十七の時で、それからずっとやっている訳です。私が始めた頃は、稽古本も木版で、大体の節「一、二」とクリ、三ユリ、本ユリというような肝心な事だけが書いてあり、それに先生が朱で、ウキや引など細かい節を入れ、本代が元は三銭で先生の朱が入って十銭と決っております。何分本が不完全なため、一にも二にも先生に教わらなければならず、自然先生に従順であり、先生は大変な権式を持ったものです。そんな訳で奇抜な謡も随分ありました。現今の様に本が余り詳しく書いてあると、一応統一されたとは言えるが、却って芸術味の失われる点や昔のような無邪気な自由さがなくなるとも言えます。

そんな時代でしたから、私は熱心に稽古した方で、十九才の時には周囲の人から無理矢理に教えさされて、知らぬ間に五人、七人となってきました。しかし私は人の懐を当てにする先生の先活というものが嫌いでしたので、兵役を終った時思い切って商人になろうと思って文房具屋を始めたところ、知人の家へ行くとき、「先ず上れ、商売の方はあとにして一寸一番」と言う様なことで、またところ、「アレは替の節だ」と言われました。(笑) また明かに御自分が間違われれと思われような時にも、本が間違っている。直して置け(笑)と言われたこともありました。それ程先生には權威があった訳で、たまには変な事もあるが良いものもできた訳で、現今沢山出来ている能の小書の中でも、始めは間違っただけで良いものが出来たため、それを採り入れて伝わっているものもある訳です。

藤井 うっかりとばしたようなこともあったのでしょうか。(笑)

宇治 「船弁慶」の後シテは、早笛になって舞台へ出でから「そもそもこれは……」とやることを、楽屋の中で「そもそもこれは……」と笛を無視してやったのでしょうかね。その方が風情があった面白。 「船弁慶」の「前後之替」です。

藤井 先生の修業中の苦しかったこと、楽しかったことを……宇治 苦しかったと言え、苦しかったです。

その頃は人が少なかつた。「翁」などは寒い時でも朝八時に始めて厳格でした。今は「翁」と脇能の間の狂言の時に地謡は中に入りますが、その時は舞台にいたままでした。「一声」の囃子が今より三倍程長く、それに全体がゆっくりしていました。「翁」から脇能の終るまで、いくら速くても三時間半はかかりました。一番寒い時に三時間以上もかかると、小便がしたくてたまらんです。(笑) だから前の晩から水は飲まぬようにしていました。

(笑) 三時間ほどして「高砂」の後シテが出てくる。拍子をトンと踏むとピリピリッ。(笑) 苦しかったです。人が少いので次々と出されて、とうとう五番とも出たこともあります。足が痛くて

ね。そういう状態でした。楽屋でも厳格で、一寸したことでも文句を言われました。今はそんなことはないのです、その代りに身も入らないとも言えます。

藤井 当時は羨けが厳しかったのですね。

宇治 厳しい方がいいんですね。何時か「殺生石」のシテをやった時、装束を付けて鏡の前にいると、先生が「このシテには良過ぎる衣裳を付けてるな」と言われた。私はシヤクに触ってね。そのあとで先生がいろいろ言われても返事しませんでした。その時初めて橋掛を歩くとき、足がふらつかなかった。成程と思いました。極度に腹が立ったから精神集中ができ、足がしっかりした。それ以後ですね、足が震わぬ様になったのは。

藤井 能に初めて出る前の晩のお気持は……。

宇治 初めは眠れないですね。若いときは寝られなくても体にはこたえません。この頃は気になって眠れないということはありません。この間の独演三番能の前の晩、近所のスクーターの音に起こされたりしてね。大抵、会の前の晩などに寝付いたところを電話で起こされたり、いろいろよくあります。

藤井 風韻会という名でスタートされたのは四十五年前ですね。風韻という意味は「風韻」二号にも書いて頂きましたが……。

宇治 雲井通にいたとき、隣の高階という独語と漢字を教えている方がよく遊びに来られ、その人に、会をつくらうと思っているが名前をどうしようかと相談すると、いろいろ教えて呉れた上で「風韻」がよいと付けてくれました。

藤井 社中で当時からの古い人は……。

工場でのよいものを造ろうと思えば職工さんに話をやらせばよい。(笑) 語は精神を集中する修業だから話をやらせるのが一番よい。「君は面白いことを言う」という訳で、早速囑託にして呉れたので微用を免れて、各寮で仕事のあと話を稽古し、会も時々やる。私のためには有難いことでした。

藤井 今でも正月になると想い出すのですが、正月の二日や三日に、宝塚や川西の寮へ行って、正月でも帰省できない挺身隊の娘さんの慰問に出かけましたね。

宇治 寒い中を藤井先生にも奉仕して貰いましたね。

藤井 お蔭様で戦争中も話を止めずに続けることができました。

宇治 戦争中も止めなかったのは、先生と浜田さんと津田(武夫)さんでした。なにしろ食糧が無かったですからね。

藤井 佐野一彦先生(本学講師ドイッ思想史担当)が岐阜へ疎開するまで続けられたし、先生も岐阜までの遠い道をよくお出掛けになりました。川上先生もお供しました。戦争中に話を語っていると、締められるような気がしましたが、精神修業をやっているのだといってやっていたが……。

宇治 近所への気兼ねもありました。

藤井 三輪町で随分あちこちで扱われたようですね。

宇治 そうです。随分能もやりました。

藤井 その頃のお弟子さんで、今でもやっていらっしやる方は……。

宇治 少数しか続いている人はありません。

藤井 宝塚へお移りになったのは何時頃ですか。

宇治 初めて出た人は少くなりました。一人だけです。永田新九郎という人は最初宝生流をやっていましたが、宝生は世間が狭いので観世へ変ろうと思っていたんでしょ。私が誘ったので観世流に変わった人です。その人が初めての会に出てくれました。この人だけが健在です。

藤井 吉岡嘉兵衛という人は……。

宇治 あの人はずっと後になってからです。

藤井 先生の御住居は最初が雲井通で、次が……。

宇治 次は兵隊から帰って生田町へ、それから平野に二年、それから旗塚通です。平野の家賃が十一円五十銭、旗塚通が七十円でした。

藤井 私の初任給が五十五円。(笑) 旗塚通は何時ごろですか。

宇治 大正の終りです。次に移ったのが熊内通で、その時分に藤井先生がおいでになりました。柚木先生なども一緒で……。

藤井 昭和七年ですね。ずっと後に昭和十三年の風水害の前後に春日野道にお移りになりましたね。それから戦争が激しくなって三田の三輪に疎開されましたね。

宇治 あの当時はエラカッタですなあ。

藤井 戦時中、軍需工場の慰問に出かけられて、私も一緒にお供して意義のある話を続けることができました。

宇治 実はあの時分微用が来ないようにと、浜田(千鶴子)さんの親戚の今仲さんの紹介で、東洋ベアリング社長の方羽さんという方のところへ行っただけです。「あなたはどういう事を考えているか」と尋ねられ、「人間は精神を集中しないと駄目だ。あなたの

宇治 戦後の二十二、三年です。もうかれこれ十五年になりますね。

藤井 戦後の語の復興というのは随分早かったですね。

宇治 そうですね。

藤井 うちの大学について言えば、サークルの中で一番早く復活したのが風韻会でした。旧制十六回の桑原君、十七回の末広君達が一先懸命に復活に努め、そして二十二年頃に復活しました。とにかく荒涼たる焼野が原で、そこで学生達がさつまいもを作っていました。何もすることが無く、心の糧が要るなと思ってたときに、桑原君がやってきたので早速宇治先生の処へ相談に行きました。語は学生の方も、一般の方も復活が早かったです。

宇治 三菱(重工・神戸和田岬)へ行きだしたのが二十二年です。

藤井 大会社は早いんですね。戦前と戦後とは習う人の気持はどうでしょう。

宇治 大きくみて変わりますね。一番感じるのは、戦前は稽古場で初めから終りまでいる人か、または半分程は聞いている人が多かったものです。今は自分の稽古が済むと帰る。時間が無いということもあるのですが、他人の語というものを聴きませんね。それから所謂、微妙なところを聴いて参考にしようとするところがない。合理的に聴いて、あとは自分で判断していいこうとするようです。昔は、「あの先生はこういう語方をする」とは言っても「本はこうだ」とは言わなかった。私はそんなことは無頓着でした。根本的原理があって、拍子に合うからどう、合わないからどうという根本の原則が問題で、他の事は問題でない。昔の人

は止むを得ず先生の話を聞いて耳を頼りにした。それだけに精神的な面では深かったんでしょうね。今は目ばかり働かせるため、解り難いです。

藤井 以心伝心ということが多かったですね。

ところで先生は語を以て社会を浄化するという気風を吹きこんで、人間を高めると同時に健康を保つということを目指しておられるようですが、これからの日本の謡曲について、先生の何か工夫とか警告とか……。

宇治 大きく働くということ、全体が動かなくてはなりません。自分の力は及ばないが、自分だけは自分の信じるところをやって行きたいです。節は自分でやれば出来ることで心配はない。ただ気分というか、その根本を忘れてしまったような進み方をしているような傾向にあるようですが、結果はどうなるものでしょうね。それでもある程度は生命を保つでしょうが……。

藤井 いろんなものが時代とともに変化していますが一番変化していかないのが謡でしょう。新作能が作られてもそれに生命がなくて……。

宇治 謡には、そりや、無言の中に人を魅きつけるものがありますよ。理屈抜きにして姿整正しく謡えば自然に心が開けてくる。これが毎日続くと段々深くなります。それも自分自身だけでなくて、それを聞いた人が引き寄せられて、同好の人が増えていく。それでいいんでしょうね。

藤井 全身全霊を込めて全人間を打込んで自分の芸術を造っていくことですね。

る。これは非常に合理的であって、声帯を破らないのです。

若い時は摩耶によく登りました。摩耶の奥の八丁は急な坂で、そこを走って登ったり降りたり、謡いながらね、息切れしないように。いつか摩耶を越えて有馬へ降り、温泉に入ってしまった六甲を越して帰って来て、その晩月並会をやったこともあります。(笑)この時は参ったですね(笑)。その他色々やったものですよ。一番よいと思ったのは、部屋を暖めて寒にやることですよ。

久下 僕達の合宿で、四日位すると声がかすれて出なくなるのは、どうなのでしょう。

宇治 声帯を破る程やるのはいけません。毎日五分か十分でも続けてやっつて、時々長時間にやるのがよろしいが、一週間も二週間も休んで、急に長時間やるのは良くないです。効果ありません。まあ毎日二十分位が丁度よろしいね。

井上 声が出なくなる程やるのはやり過ぎですか。

宇治 声帯が破れる寸前にやめる、(笑)声がかすれるくらいはあの程度よいでしょう。

前田 一年生などは合宿に参加すると急に良い声になるようですが……。

宇治 そうでしょうね。しかし合宿を重ねるよりも、毎日やるのが良いのです。実際ある程度までは順調に上達しますが、それからが困難ですね。

井上 先生がいつもおっしゃる、腹に力を入れるというのは多く曲をこなして判ってくるものですか。

宇治 今では形式上、世襲の階級性が強いです。こんなことは芸術に不必要なんで、時に憤慨することもあります。宗教社会でも避けられないのですから仕方がないときらめ、それを抜きにして、正しいものが栄えて行き、魂を打込んで行けばその人が幸福になる。まあ、そういうことですね。

藤井 もとを正すことが大事ですね。人間が求めているのは、精神ですからね。

宇治風韻会という組織の中で、神戸大学の風韻会が三十年になる訳ですが、学生達をお教えになって……。

宇治 学生の稽古の態度は昔も今も変わらないですね。これが神戸大学の良さですね。

三十年の間には色々の思い出がありますね。関西学生能楽連盟も最初は四校連盟といい、国重さんが活躍された時代です。五校連盟の頃には、前田、諫山、松田の皆さんが風韻会の真価を発揮されました。戦前の学生さんは物事に徹底するところがありましたね。純真という点では今も変りはありませんがね。

しかし稽古場ではさつき申しましたように変わってます。

久下 先生が謡をお習いになった頃はどんな練習方法をなさいましたか。

宇治 色々ありましてね。寒稽古というのは、正月六日から始めて、寒の間歳越までやる。これは、部屋の中を暖め、蒸気を立てておいて一時間半程やります。初めは声を出さずに腹だけで「それ青陽の春になれば……」とやり、次にスリ声というか、喉をすって「それ青陽……」とやり、しまいにまともな声を出してや

宇治 そういうものでもないでしょう。それは座禅と同じで、声だけでなく息を整えなければだめですし、気合ということも大切ですよ。これは一朝一夕にできるものではないですね。

私はいろんなことをやりました。正座法もやりました。手を膝に組んで背骨を真直ぐにして、天から清らかな水が頭のとっぺんに落ちてきて、これが身体の隅々まで洗い清めていくという思いをこめて、一時間も冥目している、とても良い気持ちになります。無念無想といいますが、何も考えないでいようと思うとかえって邪念が湧いてくる。(笑)これは駄目です。今言ったように、天から清水が落ちてくるという気持ちで正座していると、無念無想になれる。(笑)先月に独演能をやったときに、その効能がはっきり判りましたね、精神的にね。

藤井 色々もつとお伺いしたいこともあります。大分時間も経過しましたので、今日はこれ位で。どうも有益なお話をありがとうございました。

須磨での

三大学交歓謡会

E・11 久下昌男

一橋、大阪市立、神戸、三大学交歓謡会は、風韻会三十周年記念大会とともに、本年度の大きな行事の一つとして常に私達の念頭を

コンクールを終つて

J・11 森 沢 展 裕

二年連続最下位という有難くない順位をいたたき、先輩諸氏には合わず顔なく、後輩諸君には、又忍耐の一年間というものを残して申しわけない気持ちです。

創立三十周年という大きな会があったためその準備等で忙しかったとはいえ、九月には、宝塚の中山寺で合宿をして四年各員の意見流通をはかったり、大会後には練習を十分につんだつもりが先の結果なのです。

コンクールは例年の通り同じ方法で行なわれ、今年審査員の先生方が少々変更になっただけでした。技術と理解の両面から審査ですが、疑問な点が残るといふのは例年本誌に書かれている通りです。

本職でない私できえ、今年の上位四校、神戸女学院、関西大学、関西学院、大阪市立大学、はずばらしかったと思います。地の呼吸がびったりと一致していた点で他の大学と一つの差があったように感じます。講評の中で、本職が語っているのではないかとまちがうほどだと評せられる学校があったほどです。

さて本校ですが、曲は鳥追舟でした。講評は次の点を指摘しました。まず曲の選択に難があったということ、即ち曲の程度が高いのでこなしにくいということ、そしてシテと子方との区別が出ていな

いということ、即ち子方の調子が重くなりすぎシテと区別が出来にくくなったという点でした。後の点はそれとして、前者は、審査の対象として審査員が心の中でその程度に応じて考えるべきものであり、比較的易い曲と程度の高い曲と同じような態度で考えているのかと心にひっかかりを感じました。

コンクールが終り今までの努力が無に帰したことは残念ですが、でも、考えねばならぬことも気付きました。姫路で練習していた当時、六甲の先輩との交歓会で、その声のボリュームに驚き、又それにあこがれ、大きな声でと練習してきたものでした。大学生の謡の良さというものは、本職的なものでなく、若さだということは心得ています。だが謡曲が芸術として、曲の理解を必要とするという面において少し欠けるところがなかったかという点に気付きました。先生に教わる時、初めて本を開く、内容は全然知らない、それなのに声を出して謡う。今謡っている人物が男か女か、知らずに謡っているといった状態にならなかつたか。節を正しく謡うこと、拍子を正しく合わせることを、声をより大きく出すこと、すべてこれ曲の理解という基礎の上に立っていることを忘れたのではあるまいか。色々考えてみるに常々の練習においても若さのあまり一本調子に謡っているのが多すぎたと思っています。基礎のない所に立てた家はくずれやすかつた。今回のコンクールはその台風になったのだと思います。基礎のない家はどこかへ飛んでいってしまった。今年度から先生も練習の方法を変更されたいとか、どのようになされるか存じませんが、今年度の台風の来るまでに、基礎の固まった家―謡曲を作られることを期待しています。

思い世の記

四年間の学生生活を了え、社会の荒波に舟出して行く卒業生に、風韻会での過ぎし日を、思い浮ぶままに綴っていたいただきました。短いようでも四年間の風韻会の生活にはそれぞれ一言には云い尽くせないことも多く、感慨一しお深いものもあらうと思われま

ひとつの考え (E) 浜 本 竜 彦

浜本竜彦自分の周囲をみると、二つの対照的な現象に気がつかないわけにはいきません。一つは「喧騒な」と形容されますが、全体としては長足の発展をしている社会であり、その様は動的であります。そしてそこにみられる物質文化はその極に達したかの観があります。他の一つは、社会を構成している個人であり、全く対照的に、無気力であるといえそうです。しかし静的であるとはいえませんが、社会の大勢が動く方向にすばやく転身する術をつけた個人です。組織の中にはめ込まれた人間であって、いわば秋風の中の一片の木の葉でしかない変な悟りを聞いた個人の群があります。成程現実はそのようなものであるかもしれません。それ故にこそ自己を失わないこと、それに同じ木の葉でも大きな葉になることが必要ではないかと考えた。そのためには、組織の中に自己を没入喪失して、何の方向性もなく、固定した思考にとどまってしまうということとを極力避けねばならないと思います。自己をとりもどすために、

心のどこかに「現代精神」から離されたところの、そしてまた、大勢におし流されてしまわないところのゆとりを持ちたいと思いましたが、それがそれは静的なものでありますが、無気力とは相容れないものです。

私は謡曲についての極端な讃美者でもないし、謡曲のために謡曲をやるといふ観念論者でもありませんが、今までのわずかな経験からではありますが、謡曲がこうした意義をもつものであるといえます。一見無気力にみえますが、これは及相的な観察です。感情の激しい起伏と時間・空間の急速な変化を伴っておりま

能を観る (E) 井 上 文 男

謡曲を習い始めて四年、およそ四十番ほど習ったが、謡曲の持つメロディーの優美さ・豪快さに増々ひきつけられるものを感じている次第である。しかし最近思うことは、謡曲は依然能における声楽という一部分に過ぎず、古い伝統を持つこの芸術は観る芸術であり聴く芸術である、ということである。即ち、自分で謡うことにくら習熟しても、それはこの芸術の一部にしか接していないのではないかと思っている。

能は音楽と演劇という二大要素に詞章の持つ文楽的要素、面や衣裳に見られる美術的要素等が融合した最高位に属する芸術である。

音楽という点ではリズムに乗っている事が指適されよう。能の生命は十二文字を八拍子に割りつける為に生じる独特のリズムであり、文章が秀れていることやメロディーが美しいことは補足的な事である。(勿論、拍不拍という事もあるが、これは拍合をヨリ効果的にする為にある。中心部分のクセは必ず拍合になつてゐる。)しかもリズム性を生む為には囃子が入らねばならない。笛の伴奏のもとに大小鼓が拍子を律し、その調子と掛声と気合とが謡曲と調和した時に能は拍子の音楽であることを見事に表現する。演劇という点では、殆んど無動作である事が却つて多くを表現する点が指適されよう。十のものを十で表象するより五で表象した方が時には十以上の効果を持つ。能面が活々とした表情を創る様に見えるのはここに理由があるのであらう。

こう考えれば素謡の稽古ばかりやつては技術の段階を低迷するに過ぎず、能を観てこそ芸術が与える陶醉を享受できるということになる。何故能が六百年間も絶えないうで続いているか。それは専門家の演能者・囃子方・地謡方が能舞台で一つの世界を創り出し、我々をそこへ導いてくれる、つまり能は観る芸術であり、聴く芸術であるという点ではなからうか。そして素人はたまたまその謡曲の部分に足を踏み入れることが出来るのである。謡うことが爽快であり、健康に良いということはその結果生じることである。従つて又、謡曲を習うことは能に親密さを憶え、曲を理解していなければおおよそ退屈な観能が、退屈どころか楽しくなる為にも必要である。

ヨウなりと意気投合し、外の写真に一瞥を与え、中に入つて行きました。舞台には一個の椅子と、トリオ・ロス・パンチョスのかむつていた、あのつばの広い、何とかと云う帽子が無難作に放置されており、客席としては、上手に坐らなければ壊れそうな椅子が五、六個並べてあり見るも貧弱なセットでした。我々が入つて行ったのを合図に、一人のお嬢さんが現われて来て、音楽に合せて、いろいろなポーズを取り始めましたが、このお嬢さんと云うのが、若秩父が顔負けする様なスタイルで、一目見るなり我々一同は頭に来てしまいました。半分程ポーズを終わった頃、入口で聞きなれた声がありました。半程程ポーズがさも嬉しそうに顔をして入つて来るではありませんか。彼等は、この若秩父を見たときどう思ったでしょう。

我々は、後半分を見てBグループを残して先に退場し、それから、トリス・パーでハイボールを飲んで寺まで帰りました。(このバアの女の子にノボセタS氏のことについては省略)Bグループはすでに帰つており、我々が帰ってくるなり、BグループのZ氏が、いきなり出て来て、先きのシヨウには頭へ来たので、腹いせに、Aグループにさんざん良いように云いふらし、Aグループが是非とも明晩は行かなければならぬ様な気にさせているので、言葉合せて呉れと云い、我々も、これに全く同感であったので、承知し、寝つくまで、Bグループと一語になつて、例のモデル嬢のスタイルの良さ、などについていいふらしました。Aグループは遂にトサカへ来て、明晩は是非行こうと打ち合せており、早く夜が明けなかなあと云つたとか云わないとか。かかる状態に対して我々は笑いを押えるのに一苦労しました。さて一夜明けて、夜になると

これからもっと多く能を観たいものだと考えている次第である。

宝塚での思い出 (E) 石村 正

私は謡を始めてから、と云うより風韻会に入部してから満三年になりますが、これと云つて強く印象に残つたものはありませんでした。その中でも、かすかに印象が残つたものを、この誌上をかりて紹介してみましよう。

これと云うのも、昨年九月の合宿のときでした。(この合宿には、関西学生能楽コンクールの下準備と云う意味がありました。)合宿所が阪急の沿線の中山寺で行われた関係上、宝塚まで出て行くのは便利でした。或る夜、我々四年生は三つのグループに分れて行動をとりました。即ち、寺に残つてマージャンをする組、(このグループをAと名付けます)何事に於いても勇敢なグループ、(このグループに属していた人からは叱られるかも知れませんが、このグループをBとします)他のもう一つのグループは、何事に於いても、教養と理性を持ち備えた、いわゆる本当の意味での大学生と云つたグループ(何を隠そう、私はこのグループに所属しておりました。このグループをCとします)この三つのグループが巻き起した珍騒動について、思い出すままに書き綴つてみます。

夕食が済んで、BグループとCグループは時間を異にして、宝塚まで出張して行きました。我々Cグループは、何か面白いものはないかと、方々を調査していたところ期待した通り、「Nシヨウ」と書いた看板が目につき、Cグループ一同は、現代インテリ必見のシ

Aグループは、勇んで寺を出て行きました。我々は、彼等の勇み姿を見送り、彼等が失望して帰つて来るのを待ちました。さて、彼等が帰つて来ました。なんと、その態度と云つたら意気揚々としていてはありませんか。彼等の話によれば、「Nシヨウ」には、いつも二人のモデル嬢が居り、たまたま昨夜は、美人の方が休んでいたもので、若秩父がその為の代役をも務めていたのだそうです。その上、Aグループは美男ぞろいであつた為か、余分のポーズまでして呉れたとのことで、我々皆は、二度トサカに來たと云う次第でした。

悪いことは出来ないものです。ハイ。

「熊野」 (E) 久下昌男

入学当初、姫路分校の謡曲部が未だ紅葉会と称していた頃のことです。最初の集りの時、植杉浩一郎君が「モミジ会はどこですか」と大音あげて現われたり、貴公子然とした森沢展裕君から、謡い方について教わつたり、また、頭を丸坊主にして髻だけ濃い前田紀一郎君の異容に驚いたり、入会当初から風韻会には数々の思い出があります。少し節廻しが出来かけた頃、初めて土蜘蛛のワキ役を戴き、何とか無事やり了せた時の喜びは今でもよく覚えています。

四年間に教わつた曲の中で、特に「熊野」は好きでもあり、また懐しいもの一つです。三年生の最後に、宇治先生の御好意で、永田先輩、前田君と共に「熊野」の能の地謡に出していただけのこととなり、何も分らぬままに一生懸命に全曲を覚えたものです。地拍

子などもまだ詳しくは知らずに謡ったのですが、地頭について謡えばよいという気楽さもあり、何とか済ませた次第でした。併しそれ以来、前田君などの御教示もあり、地拍子について、大体のことが分ったのは大きな収穫でした。能の当日は、後からの響く音量に圧倒されるのか、声が思うように出ず、その上、一時間を上回る長時間舞台に正座せねばならぬので、足が痛く、おまけに眼鏡を外したためにシテの舞も観客席も霞んでまるで夢心地でした。恐らく演能の一員として舞台上に上ることは、これが最初で又最後であろうと思われ、本当にいい経験になったと喜んでいました。

話は少し廻りますが、筑摩書房からソノシートの付いた、現代謡全集が発刊せられ、この第一回の配本が「熊野」でしたので、早速買ってよく聞いたものです。別にレコードで謡い方を覚える気持は毛頭なく、唯、観賞する積りで聴いていました。特に「文の段」は大好きで「甘泉殿の春の夜の夢」ばかりをかけていました。判然とはしませんが何か魅かれるものがあったのは事実です。気持が落ち着かない時などこの曲を聞いていると、気分がまぎれるといつては変ですが何となく安らいたいものです。三年生のときの暮から精神的に少々参ったことがあった時にもいささかなりとも気持を柔らげて呉れたと思います。不幸にして自分の気持の全てを打明け語り合える友人を持てなかつた自分にとって、この曲がある程度一つの慰めとなってくれたことは否めません。

何ともしとめのないことばかり並びましたが、いろんな意味で「熊野」は忘れることのできぬ曲の一つです。

もうらうべき箇所は直してもらい、疑問点は質問して謡の節をできるだけ正しくマスターすることに努めた。二年の大学祭には素謡「羽衣」をシテ森沢ワキ前田地謡植杉浩、久下その他で謡ったが、済んでから福光先輩(E9)に「前田うまくなつたぞ」とお世辞のつもりで云われたのを本気に受け取ってうれしかった。その福光さんが神戸製鋼所に入社され、二年後今春私も同社に入社することになったのは全く予想もしなかつた偶然である。入社を前にして良き先輩をもっていきなことも幸に思っている。七月の合宿期に私は他の事情と重って参加することが出来なかつた。今想い出してもこの合宿に無理してでも何故行かなかつたのだろうと無念で致し方ない。以後下級生に対しては、「どんな事情があるにしろ合宿には必ず行け」と命じている。

いよいよ十一回生もシニアに上がることができた。そして毎日昼休み時に部室に通った。上級生は部室にいつも来いなどは云わなかつたようだが、部室に行くことが私の義務だと考えていた。シニアの講義が始って二、三日経った日の日記を見ると「謡をやる態度だつてそうだ。もつと真剣にあるべきだ。紳士のたしなみ程度としか考えていないのではないだろうか。サークルの一員であることは、友人を得るには確かによいかもしれないが、やはり一芸に秀でるべく技術の高揚を目指すべきではなからうか。私は強い違和感を感じる」と書いている。(私は突然の環境の変化で結局その学期中、煤がつまつた煙突の様な状態で過してしまつた前期には合宿に行かず、後期は空ろに送つたので貴重である筈の第二年目を棒に振つてしまつた。)

風韻会に関する思い出

(E) 前田紀一郎

振り返り見れば案外短い四年間であつた。しかしあの時はこうだつた、その時はあつた次から次へと数々の思い出が眼裡を廻ることから考えれば、変化に富んだ永い四年間だったのかもしれない。

姫路分校の当時の紅葉会に入り週一回の例会で稽古が始つた。六月頃に六甲台風韻会と紅葉会の第一回の交歓会をもち七月に合宿した。我々シニア生はシニア先輩の指導をうけたのだが、私自身について云えば、丁度合宿の前夜から謡らしく謡えるようになった。先輩連の柔吟の優美さと剛吟の力強さ、その音量の偉大さに「なるほど先輩だけのことはあるわい」と半端感服、半端心決するものを覚えた。

尚この合宿で私はその個性溢るる風貌で全先輩に存在を認めてもらい、後々までも大へんな得をした。二年生がシニアに去つてしまつて一年生だけの後期を迎えた時には部員四名だつた。新部員を募つてから、僅か半年先輩の我々が、あたかも何事も知りつくしたような態度で練習を開始した。その年の五月の大学祭の折、姫路分校紅葉会も素謡「紅葉狩」を六甲台講堂で謡つたが、多少謡曲の節の判りかけた私は、何とも奇妙な謡に、地謡を同吟しながら憤怒に似た感情をもつたものだ。我々十一回生は後期に入るや週一回の練習を、毎日の練習に切り替え、週一回都留先生の来られる日に直して

私はサークルについての右の基本的考え方、すなわち技術の習得更には高揚第一という考え方は今も変えていない。すこしでもうまく、上手な人の真似を、当会においては師範の真似をして常に前進を心掛けてこそクラブの一員としての義務を果しているのだと考える。この技術的鍛錬の中において初めて人格の修養が可能であり、又その場合においてのみ真の友情を得ることが可能であると信じている。私は残念にも技術的にも思つていた様には上達せず、従つて精神の方も満足に充実せず、限られた四年間を終えねばならない。偏に我身の怠慢と不節の結果だと遺憾に思っている。このまま並居る諸先輩の中に入っていくのに危惧の念を抱く者ではあるが卒業後も精進することを誓つてお許しを乞いたい。

(昭和三十八年二月記)

「風韻会」での二年半感じたまま

(L) 松村喜代子

卒業をひかえて、風韻会のことについて何か書けとのことだが、私としては何も書きたくない感じだ。クラブ活動としての「風韻会」と、その中の自分自身の位置を考えてみた時、何も云えない自分を感じるし、そんな自分がみじめでもある。けれども、とに角この二年半というもの、つまり大学生活の大部分を「風韻会」というサークルに属してきたのだし、非常にゆがんだ形ではあつたが、その中で動いてきたのだから、それはそれなりに感想らしきものはある。その感想らしきものを結論的に云つてしまえば、私にとつて

「風韻会」というサークルに属したことは成功でなかったということになる。その原因は色々考えられるが、なんといつても一番大きなものは、私の態度が建設的でなかったということである。いつも誰かがお膳立をしてくれるのを待っていたような所があった。こちらから積極的にクラブ活動に不満があれば、それをなんとか解決してゆこうとの努力が欠けていたし、又自分では努力したつもりの時できえみんなに通じる様には出来なかったことである。これが一番大きなガンであったことは確かだが、だからといって「みんな私が悪いのです。だから仕方がないのです」という風にあきらめ悟ってしまつてもうは毛頭ない。それだけではこれから何も生み出す力にはなり得ないし、実際それだけではなかったのだから、「風韻会」で一番奇妙なのは「昼休みの練習」である。月曜から土曜までのいつでもいい本人の都合のいい時昼休みに顔を出す。お弁当を食べて次の授業が始まるまで時間がある。さて謡でもうなろうか。そんなクラブ活動に対する態度がどこにあろうかと邪推したくもなる。これを六甲にいない者の「ひがみ」とかたづけられてしまつてはやりきれない、大学生活の中のクラブ活動に対する対したの問題ではないかと思う。

第二、クラブの問題でも、何かの催し事でも何んでも、数人の人はそれについてよく知つてもいるし、その為に色々仕事もしている。けれど残つた部員は、その内容を知ろうとしないのか、又知る機会がないのか、与えられないのか、つんばさじきに置かれる状態になることがある。

第三、技術の上達は勿論必要である。しかしそれが目的ではない

大学に入って、一番に捜したのが謡曲部、期待して入部したのですけれども、実力はそこらの高校生以下、がっかりしました。三、四年生がいなかったからしようがないのですが、交換会で六甲の先輩の声のポリウムを知つたときは驚いたものでしたが。

「謡曲をやりたいから入部しました」とエクランのコンパで云えたのも、本心からそう云つたと思つています。人に謡曲なんて古くさいと何度もいわれたのに、何か引きつけられる所があつて今日までやって来たのだと思つています。座ることの気持よさを教つたのは謡曲でした。自分でも何かやれると自信をつけてくれたのも謡曲でした。又心を休めさせてくれたのも謡曲でした。学生生活をふり返つてみて、謡曲という良き同伴者のあつたことを感謝している今日このごろです。

「漱石と謡」

(丁) 桜井 豊

「想い出」というのは時間の大きさとどうか期間の長さに比例するものでありますので、一年足らずの間には想い出らしき想い出がありません。最も苦しい想い出は、「賀茂」の素謡と「鳥追舟」の連吟をやつたことあります。また能謡曲についての知識水準があまりに低すぎまして、到底感想文、回想文をモノすることはできないのはなほ遺憾であります。というわけで課題につきましては、何も書けないという申し訳ない事態にたち至るわけでありませぬ。少々愚にもつかない話ですが「漱石と謡」という標題で彼の書簡集の中から面白いと思つたものを抜粋致します。

と思う。ひたすら謡つていてはいいのであろうか？

以上感じのまま、大ざっぱに拾いあげてみた。私自身クラブの練習にあまり参加出来なかつたし、又しようとする意志もある程度なくしてしまふ時期もあつた状態で、「風韻会」の否定面からばかりものを云うのは大変図々しいのだが、あえて書いてみた。

なお次のことはどうしてもつけ加えておきたい。舞囃子「小袖曾我」「紅葉狩」をやれたことは、大変勉強にもなつたし、自分としても一生懸命やつたつもりなので、「風韻会」の二年半の中でひときわあざやかに思ひ出される。これだけでも「風韻会」に入った意味はあつたのかもしれない。

謡曲という同伴者(丁) 森沢展裕

謡のことばかり、というのが私の学生生活でした。謡というものを自分で謡つたと(読んだといつた方がいいかも知れませんが)いうのは、高校一年の時だった。私の高校(姫路西)には、高校にはめずらしい謡曲部があつたのです。風韻会でも同じですが、入部ポスターに、又紹介に、引かれて何げなく入つた五、六人が、先輩の声にまねようと、無理に声を変えて謡つたというのが最初で、それ以後七年間、一緒に生活して来たのでした。高校の部は、風韻会とは反対に女性が多く、両手両足に花以上で大変上品な部でした。

謡曲を続けてやりたいと思うようになったのは、三年間ほどやつてからです。座つた後、足がしびれ、何ともいえない気持、この感じが好きなのですが、こうなつたのもこのごろからでしょうか。

書簡集より

太鼓を打たれる由、鼓を打つ人と鼓の音をきくと頗る人意を強うします。二十世紀にあんな閑日月があると思つてからです。僕も御指定の教師に従つて謡の稽古を致し大いに時勢を後ろへ進歩致したい。近頃自然派とかいうて無暗に前へ出たがるから小生は不自然派でもおつ立てて後ろの方へ参ろうかと思ひます。

明治四〇・八・四 高浜虚子へ

うたいの本は病院で大声を出して謡はれませんかから寄こしても大丈夫である。夫から是からさき一年やめぬなら己めてもいいが、やる必要もないならやる方がいい。医者に聞いてみる。明治四四・二・二 夏目鏡へ

拜啓本日回診の時病院長平山金三先生と左の通り談話仕候間御参考のため御報知申上候。

且那樣「もう腹で呼吸をしても差支ないでせうか」

病院長「もう差支ありません」

且「では少し位声を出して、——たとえば謡などを謡つても危険はありませんまいか」

院長「もう可いでせう。少し習らして御覧なさい」

且「毎日三十分とか一時間位づつ遣つて危険はないですな」

院長「ないと思ひます。もし危険があるとすれば、謡位已めて居たつて矢張り危険は来るのですから、癒る以上は其位のことには遣

つても構はないといはなければなりません」

且「さうですか。有難う」

右談話の正確なる事は看護婦町井いし子嬢の堅く保証するところ

に候。

明治四四・二・一〇 夏目鏡へ

謡はうたい出した、出てもっと大きな声を出して遣りたい。

明治四四・二・二四 坂元三郎へ

私の風韻会生活 (E) 植杉浩一郎

私の四年間に亘る学生生活の中で、風韻会生活は大きな部分を占めている。大学入学と同時に入会し(当時姫路分校謡曲部は紅葉会という名であり、後に、それは風韻会の支部として姫路分校風韻会と改称された。)その後合宿・コンパ・謡い会・他校との交歓会等を経験し、団体生活の中で、大いにもまれて、人間の成長を遂げ得た。

私の風韻会生活での収獲は、多くの良き先輩、同輩、後輩を得たことであり、更に又、対人関係に如何に処していくべきかについて実践的に体得したことであった。凡そ社会は人間の集まりであり、人間関係というものが、我々が生きていく上に於いてより切実な問題となりつつある今日、対人関係に自信を得たことは大いに愉快とする所である。

私の学生生活は、混乱・低迷の時期であった。諸々の煩悶・健康上の事由等により、私は、学問にも、謡曲にも、更に一剣道部にも所属していたのであるが、一剣道にも没頭し得ず、いずれも生半可のままに終わろうとしている。

このような訳で、恥しい次第であるが、未だ謡曲に自信をもつて

とができていないのである。自分としては、真剣に、自己に忠実に生きたつもりであるが、かかる結果に対しては、これを素直に受入れなければならぬ。

真のクラブ活動は、部員相互間の練習を通じて、お互いの人間性を高めていくと同時に、他方に於いて、そのクラブ活動の対象であるところの文化活動、運動の技術、技能に熟達、上達するものでなければならぬ。この意味で、私の風韻会生活は片手落ちであったと云えるだろう。クラブ活動の一方の柱である謡曲の技能の熟達、上達そのものに関しては不合格であるだろう。しかし私は後悔はしていない。何故なら、他の人間性を高めていくという点に於いて十分な成果を収め得たことに満足しているからである。

私は、風韻会生活を通じて多くの友人を得た。更に、対人関係、人との交際に於いて基本的な姿勢を確立し得た。即ち人との交際に於いて、己の誠を貫き通すことが唯一無二の真理であることを確信したのである。この信念は終生変えることはないであろう。以上の如く、私は風韻会生活を通じて自己の人格を高め、良き友を持ち得たことを、大きな喜びとするのである。

いよいよ、風韻会を去るにあたって、後輩諸君が、自己に忠に、そして真剣に、痛烈に生きるよう希望する次第である。

大いに悩み、大いに悦び給え。後輩諸君の健闘を祈っている。

(昭和三十八年 二月八日記)

☆ ☆ ☆ ☆

ども麻雀が下手になった。入学当時は相当の腕だったらしいが今はさっぱりで、麻雀の局面に於いて強気と弱気がちぐはぐで、気の毒で見えておれない。最近将棋に鞍替えした様に見えるが、上達あらんことを!!

U君は古武士的風格を漂わせ、部内の雑務的なことを立派にしてくれ、なかなかのよき人物であるが、これまたマーシジャンが弱い。しかしながら、彼は麻雀が好きである。ところが、マーシジャンが彼を嫌うのである。アアヤンヌルカナ。

以上三君を称して我が風韻会の三大カモと名付く。彼等の上達の早からんことを切に望んでこの亡言に謝意を表す。

部長だったM君、なかなかのやり手で、色の道も相当いけるようにみえるが、マーシジャンも強い。大抵のところ負けることはないと思われ。風韻会では三指に入る。K君、渉外を担当され、大変な活躍をされた。その為か最近の麻雀は従来の面影がない。他の人がリーチをかければ必ず手のうちがよくてもおける。よってこちらとしては有難いわけである。M君、私の下宿の近くに下宿していて時々やるが、なかなか強い。大きな手であり、そのあがりを見せるとき、十四枚のパイを左右にゆきぶりながら倒す仕草は威圧感を感じる。香港にも遊びに行き、クニーヤンともなかなかによしになり、中国娘の腕前もあがったか……

G君、自分で強いと思っているらしいが、そうでもない。強気一点張りで打っているようでもあるが、そうでもない。愉快な人物である。負けるともうマーシジャンはこりこりと云うけれども、さそえば必ずついて来ると云う愛きよがある。しかし徹マンは絶対にしな

風韻会マーシジャン考

(B) 植杉繁造

卒業まであと僅か、風韻に載せるから何か書けとのこと。あまり真面目な部員ではなかったので謡については判らずにまいになりそうである。

そこで麻雀を通してみた各部員の一端を先輩後輩諸氏にお伝えする。そもそも麻雀とは何か。皆さんよく御存じのあの楽しい遊びである。中国に古くより始まり、我国には大正末期頃より流行するといふ。麻雀のあのルール、パイの数を考えたのはよほどのアホか天才であろう。赤い中国では麻雀なる遊びは亡国の遊戯として禁止されていると聞くが、我国、なかでも神戸大学では盛んである。

さて我が愛する風韻会諸氏の特徴な麻雀を語れば、責任の一端を免れようと思う。

先ず風韻会三大カモに登場していただく。この三人は大いなる奉仕の精神を発揮し、ある部員の如きに対して滞納せる一カ年の部費を代って支払うという浮目にあった御仁達である。この三人とは、M君、I君、U君で、M君は能面的な顔立ち美しく、なかなかの美男子なれど麻雀は余り強くない。

彼は清一色か混一色しか知らないのではないかと思われるぐらい万子の混色が好きである。だから我々としては、彼の混色さええ気を付ければ問題外である。

I君は謡の方ですっかり腕をあげているが、その反比例か知らぬ

い。少しでも疲れるやめるといいだすのは年に似わずしつかりしたところがある。頼もしい。

I君、最初は弱かったけれども、最近めつきり腕を上げています。腕のあがったのを自慢していたが、先日へこませてイタイムにあわせておいたのは少し楽になっただろう。バク才はあまりない。学園の方に精を出すことを私は望む、よき銀行マンたれ。

Y君、とらえどころがなくて書きにくい。この間の大雪のとき、スキーに出かけ、カンズメにされ、こちらをはらはらさせたが、本人は落着いたもの、マージャンは負けると一つに手を決める傾向あり。バク才があるから強くなるであろう。G・I・Y君と私は御影分校からのメンバーで試験のヤマがあたる毎に勇んで大学クラブへ出かけたものである。トータルすると私が一番勝っているようであるが、このよき仲間とも別れなければならぬ日が来るのかと思うと淋しい。麻雀に於いて私は実際大きく負けたりはしない。この三君が麻雀をしているとき、私を恐らせると、恐ろしい程、ツクのである。I君は私を一度沈めようとして虎視タンタンとしてねらっているらしいが、チトやソットではマケラレマヘンデ。私は麻雀をして負ける気がしない。これは守り神として、例なる写真を内ポケットにしはせているが故かも知れない。

他の諸君についても書きたいが、彼等とは一度もしたことがないので、ここにて風韻会マージャン考を終る。

上記の諸君に対して私の悪気のない毒を許されたく、平に御許しを乞う。

— 以上 —

(B) 安田芳治

早いもので謡を始めてから足かけ四年になる。技術の方はともかく年期からいうと最古参の一人にはいると思っている。僕が謡に興味を持ったのは、それが何となく個人で楽しむものであるような気がしたからであった。さて入部した当時は何もわからず、何んでも良いから大きな声を出せとの先輩の命に従っていた。これは今でも少しも変わっていない。亀井、原、福光氏らの諸先輩から竹生島の「竹に生まるる鶯の……」のところを習った時のことは今でも覚えていて、これが僕と謡との結びつきの初めなのである。それ以後は全く別の方向へ向ったといえる。そのころ将棋部と同居していた関係もあり、風韻会でも練習の途中将棋が出来た。

僕はむしろその将棋の方に興味があり、六甲台まで登って来てついでに謡をやっていたといった方が良いかもしれない。

それでその後、謡の方はたいした進歩もなかった様である。今日に至るまで将棋の方に片足をいたまま四年をすごし、それと共に謡の方も四年間続けることになったのである。

この間の最大の出来事といえば、何んといってもコンクールに於る最下位の宣告である。何んとも言ひ分のしょうがない、あまりにも個人プレーとしての謡を重視する雰囲気が強すぎた様である。

これは全体のチーム・ワークを生み出してくれなかった。今にして思えば早くからマージャンでも盛んにして、その方面の修養をつむべきだった、それを見のがしていたのが残念である。「後輩心すべし」

昭和三十七年度風韻会活動総括

三十七年という年は、神戸大学風韻会にとっては創立三十周年、宇治風韻会には四十五周年の記念すべき年であり、加之に三大学交歓会の主催校ともなつて多忙なまた意義ある年であった。

三月

二十一日(水) 卒業生歡送会

於六甲台学生集会所

桜の蕾もふくらむ一日に、また八名の卒業生を送り出した。「素謡20番、仕舞1、独吟1」宇治師範、藤井、丹波、古林、米花、柚木、福光、川上の七顧問。多田さん、大角(E2) 熊野(E3) 青木(B7) 近藤(E8) 池内(B8) 有田(B8) 亀井(B8) 原(B9) 福田(E9) 福光(E9) 山崎(E9) 上野山(B9) の十二先輩。

四月

九日(月) 十二日(木) 春季強化合宿

於神戸市再度山大竜寺

参加者—姫路分校会員も含めて二十一名。一日六時間半のハード・トレーニングだった。練習曲「竹生島」「賀茂」「吉野天人」「芦刈」「蟬丸」「放下僧」「小袖曾我」「土蜘蛛」「狸々」以上九番

二十九日(日) 関西学生能楽連盟月並会

於関西大学

連吟「賀茂」会終了後北祐吉氏等の講演があった。またお流れにはなったが交歓ソフト・ボール大会の計画もあり、学連としては新しい試みとして注目される。

五月

五日(土) 第六回三大学交歓会

於須磨幽仙閣

別記の如く神大宝生会とともに主催し盛會裡に終了した。また会後のミーティングも楽しく交歓の意義を大いに發揮した。

素「賀茂」(シテ大良晃彦ツレ有田栄一ワキ山本正人。仕「巻絹」(森沢展裕)「玉鬘」(井上文男)「舟弁慶」(久下昌男)。舞「芦刈」(前田紀一郎)「紅葉狩」(松村喜代子)。合同素「土蜘蛛」(頼光石村正)「胡蝶」(和田せき子)。先輩連吟「草子洗小町」仕「融」(宇治正夫師範)林(EB堤(B6) 大道(E7) 亀井(B8) 原(B9) 山崎(E9) 山本(E10) 岡本(L10) 以上八先輩が参加された。

六日(日) 同右交歓ハイキング

於六甲山

折からの連休で入出が多く難渋した。しかし学校校庭でのミーティングは友好的で結構でした。

六日(日) 宇治風韻会四十五周年記念大会

於大槻能楽堂

有志数名参加す。

十四日 大学祭文化サークル合同発表会

於神戸国際会館

時間が良かったせいもあるが、かなりの反響を得て力強かった。

素謡「賀茂」(シテ大良晃彦、ツレ有田栄一、ワキ山本正人)

二十日(日) 大学祭園遊会模擬店「狸々」開店。

於六甲台学舎校庭

十三日が雨で流れて一週間遅れての園遊会。十五余に上る他店をおさえて衛生、品質、経営方針第一位におされて賞状を得た。だが良からぬ呑吐会員が只飲みし、結局収支はトントンに近い状態だった。明年度もやるのならはつきりとケジメをつけなければだめだ。教授連も多数来店された。因みに献立は串カツ二十円、サシミ五十円、酒五十円である。

二十七日(日) 大阪市立大学能楽研究会四十周年記念大会招待出演。

吟「春栄」

六月

三日(日) 第六回奈良女子大観世会・風韻会交歓会

於奈良称名寺

ミーティングも、謡会終了後の小雨降りそぼる奈良市内の遊歩も楽しい会でした。

当方、素「小督」(シテ久下昌男、ツレ佐々木肇宏、トモ、有田栄

一、ワキ大西和夫)。連「春栄」(シテ前橋隆義、ワキ山本正人、ワキ・ツレ有田栄一)。仕「紅葉狩」(大良晃彦)。「狸々」(山本正人)。「経正」(森沢展裕)。「羽衣」(井上文男)。「天鼓」(前田紀一郎)

於姫路分校ホール

例年と異なって仕舞をたくさん加えて華やかな会となった。だが姫路での会も明後春には学舎統合が予定されているから、あと一回というわけ。

素謡(六番) 連吟(一番) 仕舞(十五番)

十日(日) 関西学生能楽連盟春季大会

於湊川能楽堂

素「小督」(シテ久下昌男、ツレ松尾敏弘、トモ小林敏三、ワキ形部靖)。「仕」鶴亀(笹部純子)。「玉鬘」(尾上裕美)。「玉之段」(松本喜代子)。「紅葉狩」(大良晃彦)。「経正」(森沢展裕)。「羽衣」(井上文男)。「天鼓」(前田紀一郎) 谷垣(L9) 中島(E10)の両先輩が見えられた。

十七日(日) 神戸女子薬科大学謡曲部風韻会交歓会

於六甲台学舎集会所

謡終ってから後のミーティングが愉しいです。

素「賀茂」(シテ井上文男、ツレ前田紀一郎、ワキ佐々木肇宏)。「連」仲光「唐船」(松原功)。「熊野」(長谷川晴美)。「舟弁慶」(久下昌男)。「芦刈」(石村正)。「鶴亀」(大良晃彦)。「羽衣」(井上文男)。「吉野天人」(笹部純子)。「天鼓」(前

田紀一郎)「狸々」(山本正人)

七月

十一日(水) 一十七日(火) 夏季合宿

於吉野山竹林院

女子会員三名を含め二十七名が参加し、技倆の向上と親睦に効果をあげた。

原(B9) 福田(E9) 福光(E9) 山崎(E9) 伊東(E9) 永田(J10)の六先輩が避暑がてら参加された。

練習曲「賀茂」「竹生鳥」「屋島」「草子洗小町」「羽衣」「天鼓」「橋弁慶」「唐船」「仲光」「紅葉狩」「舟弁慶」以上十一番。

九月

四日(火) 一七日(金) 夏季第二次合宿

於宝塚中山寺

四年を対象とした合宿、随分と楽しい合宿だった由。練習曲「三井寺」「鳥追船」十四名参加。

十一月

十一日(日) 神戸大学風韻会三十周年記念会

於六甲台学舎講堂

別記の如く多数の顧問や先輩方の御援助によって盛会裡に終了することができた。

素謡(十二番) 連吟(三番) 仕舞(二十三番)

二十五日(日) 宇治風韻会四十五周年記念大会。

於湊川能楽堂

有志九名が参加。

十二月

八日(土) 関西学生能楽連盟秋期大会。

於大阪山本能楽会館

素「巻絹」(シテ山本正人、ツレ音部允利、ワキ有田栄一)。「仕」芦刈(長谷川晴美)。「屋島」(井上文男)。「井筒」(大良晃彦)。「班女」(前田紀一郎)

福田(E9) 永田(J10)の両先輩が応援に來られた。コンクール 連吟「鳥追船」

コンクールの結果は予想だにせぬ最下位の十位だった。種々言いたいこともあるが、我々の「鳥追船」が十分のものとは言いがたかったことは認めねばならぬ。だが学生の謡が古典の型のなかにその若々しき、力を置き忘れて小じんまりとまとまるのを良しとするのは避けねばならぬ、現役会員の今後一層の精進を期待し、今回の少々苦がすぎる結果を良薬とさんことを望む。

二十三日(日) 三十七年度風韻会謡納会。

於兵庫県社会事業会館

参加者は十五名と少なかったが、会後のスキヤキをつつきながらのミーティングは相当痛烈な反省会となり有益だった。

素謡(五番)。

本年度練習曲目は次の通り。

「賀茂」「頼政」「百萬」「三井寺」「春栄」「放下僧」「巻組」
「唐船」「仲光」「鞍馬天狗」「鳥追船」以上十一番

—1963. 2. 22A. D.—

昭和三十八年度風韻会行事予定

現在、風韻会全体としてはレベルの問題が、また内部的にはたこ足大学のサークルとしての技術的人的断層の問題が存する。肉体的精神的経済的負担も大となろうが謡曲の練習は怠つてはならない。会員の奮起を切望する。

三月

(二十四日(日))十一回生歓送謡会(於六甲台学生集会所)

(二十七日(水))一三十一日(日)春季合宿(於京都東寺)

四月

下旬 関西学生能楽連盟月並会(於

五月

三日(金)第七回三大学交歓会(於波多野舞台)

中旬 第十二回神戸大学祭文化フェスティバル

下旬 奈良女子大・神大交歓会

六月

八日(土)関西学生能楽連盟春季大会(於山本能楽堂)

中旬 神戸大学風韻会春季大会(於姫路分校)

下旬 神戸女子薬科大学・風韻会交歓会

七月

中旬 夏季合宿(一週間)場所未定

八月

下旬 夏季合宿(五日間)場所未定

十月

中旬 強化練習

十一月

中旬 神戸大学風韻会秋期大会(於六甲台学生集会所)

十二月

十五日(日)関西学生能楽連盟秋期大会(於大槻能楽堂)

下旬 昭和三十八年度納会

三月

下旬 第十二回生歓送謡会

第七回三大学交歓謡会のお知らせ

恒例の本交歓会も第七回を迎えて、大阪市立大学の主催で行なわれることになりました。先輩の連吟は「熊野」となっておりますので先輩の皆様方、是非とも御参会下さいまして舞台に、またコンパに興じて頂き、現役の活動振りを御覧頂きたいと存じます。

一、日時 昭和三十八年五月三日(金・憲法記念日)
一、場所 大阪波多野舞台

(詳細は後日改めてお知らせ致します。)

先輩各位

神戸大学風韻会

編集後記

★三十七年度は非常に多彩な一年でした。

五月の三学交歓語会・六月の関西学連春季

大会・十一月の三十周年記念大会・十二月

の学連秋季大会（謡曲コンクール）等々枚

挙に暇ありません。その上、宇治風韻会の

輝しい四十五周年記念と重なり、日曜日に

は殆んど何かの語会がある程でした。

★一口に三十年と言ってしまうはそれまで

ですが、未だ私達の生れる以前から、風韻

会が興隆の一途をたどっていることを思え

ば感慨もまた一しおです。

★本年度は三十周年記念事業の一環として

雑誌の発行が取上げられており、記念号と

して何とか立派なものを作りたいと念願し

ていましたが、果して満足していただける

かどうか不安です。編集子の努力不足をお

詫び致します。

★お気付の方もあると思いますが、本号か

ら表題「風韻」を宇治先生にお願いして、

新しく書き代えていただきました。壮年期

の第一歩を踏み出した「風韻会」の前進を

象徴しているかの観があります。

★最後ながら「風韻」記念号発行に当り、

御支援を賜りました皆様に心から御礼申上

げます。

（久下）

編集委員

前田紀一郎

井上文男

久下昌男

大良晃彦

山本正人

昭和三十八年三月十五日印刷

昭和三十八年三月二十六日発行

神戸市灘区六甲台町

発行所 神戸大学風韻会

大阪市城東区野江中ノ町一丁目一

印刷所 水三島紙工株式会社

電話大阪 931 一六七四 八時